



TITLE:

<學界展望> 我が國に於ける占婆史研究の現状

AUTHOR(S):

杉本, 直治郎

CITATION:

杉本, 直治郎. <學界展望> 我が國に於ける占婆史研究の現状. 東洋史研究 1937, 2(3): 247-261

ISSUE DATE:

1937-02-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/138736>

RIGHT:

我が國に於ける占婆史研究の現状

杉 本 直 治 郎

王政末期の南スペインに、モール人の據つたといふ最後の遺蹟を、語る友もなく獨り遍歴してゐた時であつた。

折しも來あはした、見も知らぬ老いたる一外人が、何かのはずみに自分は日本人を知つてゐる、と話しかけたところから、よく聞いてみると、それは私の全く知らない人でもなかつたといふので、いつしか旅の道づれとなつた。この種のそこはかとなき思ひ出が、不圖、腦裡に浮んで來る。見ず知らずの他人であつても、話しあつてみると、何處か、誰人かに、何かのかゝりあひや、つながりをもつて來るものである。そののやうに、占婆チヤムパなど縁遠いものゝやうでも、それからそれへと辿つて行けば

古くから今に至るまでの間には、彼我の關係も、全然つかない譯でない。

一寸、氣のついたゞけを擧げて、言語や土俗の方面は兎も角、奈良時代に於ける平群廣成等の彼の地に漂着したのを初見として、かうした漂流による關係が、これ以前にも、この以後にも、相當あつたであらうことは、風向や潮流などからも想像される。奈良朝から平安朝の初にかけて、我が國に行はれた林邑樂は、その實、扶南樂やその他のものであるにしても、はたまたそれを傳へたといふ林邑僧佛哲が、たとひ假托の人物であるにもせよ、占婆が林邑の名によつて、邦人の口に膾炙されたこ

とは事實である。かの三河に漂着した崑崙人や、その裔した綿の種も、解釋の如何によつては、占婆と關係がつかぬこともない。御朱印船貿易の時代になつて、實際に通交した國々の中、チャンパンと讀まれた占城はいふまでもなく、迦知安や、問題の田彈も、畢竟この占婆と關係ある地方名に外ならぬ。これらの地方から輸入された主なるものが、沈香の極品として、奇楠香や伽羅香の名で珍重されたことは、周知のことに屬するが、今も一部の人に愛玩されてゐる矮雞のチャボが、占婆から渡來した名残であることは、餘り知られて居らぬやうでもある。かやうに概瞥しただけでも、この「消え失せた王國」(‘un royaume disparu’)は、我が國や我が國人と、全く縁がない國でもないといへるであらう。然らば本邦に於ける占婆史研究は如何であらうか。

占婆の言語や土俗が、延いてはその占民族^{ジャバ}までが、我が國のそれらと、特殊の關係あることを唱道されたのは故坪井(九馬三)博士で、これに關する諸篇は、『我が國民國語の曙』に收められてゐるが、その中「チャム民族の土俗」以外は、かくの如く考へる學者もあるといふ位に

輕く取扱つて置いてよからう。松本信廣氏の「チャムの椰子族と椰子の實説話」(『民俗學』五ノ六)は、印度支那トーテミズム研究の一節として、注意すべきものである。「チャムの古塔を訪ねて」(『史學』一四ノ四)それを紹介すると共に、占の遺蹟が、安南人の迷信によつて保存されたものなることを明らかにされた、ガスパルドヌ夫人の勞は、多とするに足る。山本達郎氏は、「Ibn Batūta の Tawālisi に就いて」(『東洋學報』二二ノ四)、それが占城であることを論證し、學界多年の難問に解答を與へられた。氏が、その Tawālisi を『大越史記全書』の茶和、占婆碑銘の Tawai によつて解釋されたのに對し、桑田六郎氏は、「三佛齊考」(『臺北帝國大學文政學部史學科年報』三)の中で、茶和を Deva の對音、Tawālisi を Devatā のそれと認められた。この點、今のところその孰れが是とも決定し難し。

私は、曾て「林邑(Campa)建國の始祖に就いて」(『桑原博士還曆記念東洋史論叢』)、從來、區連説が定説であるのに對して、區達 || Cri Mara 説を唱へたので、松田壽男氏の「南海貿易の搖籃時代」(『世界歴史大系』4)には、「區連(一に區達)」と記され、山本達郎氏の「印度

支那の形勢と海上貿易」(同上5)には、「區連 (C'ri

Mara 或は區達の誤?)」と載せられ、區連説と共に、

幾分注意されてゐたが、ガスバルドヌ夫人が、「杉本氏

『林邑建國の始祖に就いて』を讀みて」(『史學』一四ノ

二)、私の説に反對され、區達説に傾かれて以來、松本信

廣氏の「印度支那の文化」(下)(『東洋思潮』)には、「區

連又は區達」とされ、區達=C'ri Mara 説は、全く葬り

去られたが如き印象を與へるに至つた。思ひかへせば早

や七年前、佛國革命記念日の「七月十四日」^{カトマシヨイ}、巴里の全市

が踊り狂うてゐる、その夜であつた。モンスリー公園に

程近き客窓で、倉卒に纏め上げ、推敲の暇もあらばこそ

そのまゝ郵送に託した、舊稿の論證に於いて、不備の點

をこそ最初より自認すれ、この説全體をば、未だ全く放

棄しなければならぬとまで感じてゐない私は、夫人の反

駁説を敬讀するに及んで、愈々その感を深うした。占婆

史研究の最も進んだ佛國の學界に於いてさへ、未解決の

まゝ放任されてゐる問題ではあり、旁々夫人が、私の再

説を促してゐられるので、與へられたこの機會を逸して

は、何の日「再び林邑建國の始祖に就いて」書くことに

なるかわからぬので、こゝに一言お答へして置きたいと

思ふ。

私が、區達=C'ri Mara 説を唱へたのは、次の如き考
から來たことである。

(イ)林邑即ち占婆は早くより印度文化圈に屬し、且つ
支那文化圈と接觸してゐる上に、大陸の半島部に位して
南洋の島嶼部とも關係があるので、本来、Malayo-poly
nesian文化圈と交渉を保ち、固有の占文化を有してゐた。

(ロ)そこで占に關する固有名詞の中には、印度風なる
ものもあれば、支那風なるもの、または支那に傳へられ
て、支那風となるものもある。例へば地名に於いて、
占婆(Campa 正しくは Campa)の名は、明らかに前者
であり、林邑の稱は、確かに後者であるが如き、これだ
ある。既に印度文化圈に屬するが爲め、占人自らも、碑
銘などには、終始 Campa 又は Campa と稱し、固有の
國名は、殆んど傳はつてゐないやうである。けれども占
語が、嚴として存する以上、占語を話す占人の人名の如
きは、占語固有のものが、全くなかつたとは考へ難い。
現に占語の碑銘や寫本などには、さうしたものが見出せ
るからである。

(ハ)當面の問題たる區連・區達・區遠のつづれが正しうにせよ、その生存年代は二世紀末であり、Vo-canh 碑銘の Cři Mara の生存年代も、二世紀末と推定される。そこで共に始祖であり、同じ年代に生存したと思はれるので、支那の記録に散見するものと、占婆の所傳に見えるものとは、畢竟同人を指すものでなければならぬ。果して然らば、これらの漢名と梵名との外に、或ひは彼れ等固有の占名がなかつたとは、いへないであらう。若しさうしたものがあつたとしたら、支那の文獻に於いて屢々見られるが如く、或ひは林邑の王名として傳へられる漢字名そのものが、その實、占名の音譯、即ち對音をあらはすものに過ぎないではなからうか。然る時、これに對する梵名は、それが音韻上、漢名と無關係である限り恐らく占の原名の意譯であるかも知れぬと想像してみた。

(ニ)蓋し林邑の地名は、漢の象林縣から起つたので、全く支那風となり、占婆のそれは、印度の Campa に基づいた爲め、純然たる印度風になつたのである。その全く支那風な林邑の名は、支那人が附けたやうに、純然たる印度風の Campa の稱は、初期に占婆に移住して來た

印度人によつて、その都の地形が印度の Cpana に類似してゐるところから、これに與へられたものと考へられる。區連・區達・區遠の如き人名に至つては、そのいづれが正しいにしても、支那で勝手に附けたものとは思はれぬので、占の原名を聞いた支那人が、その對音として記したものと考へる外なく Cři Mara のそれは、占婆の場合と同じく、初期移住の印度人によつて、梵字梵語によつてその碑銘が書かれた爲め、その名も亦、梵語の形にてあらはされたものと考へざるを得ない。

(ホ)かくの如く考へ來つて、區の古音の中に *Ku のあることを推定し、占語で Ku の意味が、梵語 Cři のそれと同様なることを知り、(A)區 || *Ku || Cři を得た。また連・達・遠の三名の中で、梵語 Mara の意に最も近い占の古語としては、*Dat 即ち達の古音に相當するものを想定するより外に求め難いところから、姑らく(B)區 || *Dat || Mara とした。かくて (A) (B) を併せ、區連 || *Ku || *Dat || Cři Mara 即ち區達 || *Cři || Mara 説に到達し得たのである。

(ハ)かくて『梁書』の區達が、最も信すべきものと如く、『晋書』の區連・『水經注』の區遠は、共に區達の誤

寫と見做され、『後漢書』の區憐は、これらと時代の一致せぬため、別人と考へられた。

以上が、拙稿の要點であるが、この區達 \parallel Cui Mara 説に反對して、「區達説に傾き度いのである」と結論された、ガスパルドヌ夫人の理由とせられるのは、大體次の三ヶ條に歸することが出来るやうである。

(1)「Cui (sic. 以下同斷) を \mathcal{E} に翻譯したと見るのは無理な氣がする。」そこで「區も \mathcal{E} ではあるが、その \mathcal{E} たるや Cui を翻譯したものではないと思はれる。」「區が既に \mathcal{E} と關係なければ、勿論連も達も達も Mara と關りある譯はなう。」

(2)そこで Aymonier の紹介せる占語で記せる『占王年代記』を検すると、「不幸にして我々の求める連・達・達のいづれかに正確に當りさうなものは見えないのである。」「されどその王名に「Kの音を含むもの絶対に多く、T・P等の強い音を以て始まるか又は之を含んでゐないものはなう。」「この意味で連の如く輕くて弱い音を持つたものゝ可能性は割合に少く思はれる。」

(3)「翻つて支那の文獻の方は、區達とある所の水經注が最も依據するに足」り、「しかも年代としては事件に最

も近く作られたるものである。」

以上の理由によつて、夫人は、「區達説に傾き度いのである」とし、その例證として「後の「東埔寨系の占に傳はれる」リストの最後の王 Po Ko など、どうやら之に近いものゝやうである。然らば區憐の憐はどうであるかといはれれば、尙それを後の考證に俟つのみである」といはれるのである。そこで私は、何とかこれに對してお答へしなければならぬ。

(1)夫人が、拙稿を讀んで下さつたことに對して、殊に微細なる點に亘り、批評の勞を執られたることに對して私は、衷心感謝の意を表する。たゞ遺憾なことは、私が $\mathcal{E} \parallel \text{Ko} \parallel \text{Cui}$ とし、 Ko を Cui に意譯したと考へてゐるのに、何故か夫人は、私が、「 $\text{Cui} \parallel \text{Ko} \parallel \mathcal{E}$ 即ち $\text{Cui} \parallel \mathcal{E}$ 」と考へたとし、「 Cui を \mathcal{E} に繙譯した」如く見做して、「些かこれは早計に過ぎないであらうか」と批評し、「無理な氣がする」と非難してゐられることである。即ち夫人の折角の批評非難は、これに關する限り、私の所説の逆に對するものであつて、私の所説そのものに對するものでないことである。ユークリッドを俟つまでもなく

逆は必ずしも真ならずで、私自身、*Ku*を*Chi*に意譯したとは考へ得るが、さればとてこの場合、然りこの場合に於いては、その逆たる、*Chi*を*Ku*に翻譯したとは考へることができぬ。若し人あつて、他人の所説の逆を以て、その人の所説と誤信し、これを批評し、これを非難するとせば、「些かこれは早計に過ぎないであらうか。」「無理な氣がする」こと無きを得るや。従つて私としては、拙稿を讀んで下さつたことに對して、心からなる感謝を禁じ得ないに拘はらず、よく讀んで下さなかつたことに對して、不本意ながら、遺憾の意を表せざるを得ぬ。

試みに夫人が、「早計」であると批評し、「無理」であると非難される理由を検せむに、夫人の第一の反對理由は、「後代のこの敬稱重用の習慣から考へて」であり、第二のそれは、「行爲の自然的過程から推して」である。その第一は、「若し杉本氏の想像される如く*ku*が*chi*の適語たることが認められ、既に*ku*の代用として用ひられてゐたならば、その後九世紀に至つて何故*ku*が*chi*に代へられないであらうか」といふのである。私の所説に従ふと、夫人は、*ku*が*Ku*の適語であり、*Ku*の代

りに*chi*が用ゐられたとせば、何故*chi*が*Ku*に代へられないであらうかといはねばならぬところである。假りに夫人のいはるゝが如く、「*Ku*が*chi*の適語たることを認められ、既に*ku*の代用として用ひられた」にしても、後世如何なる場合にも、必ず「*ku*が*chi*に代へられ」ねばならぬといふ筈はなく、重用されたとして差支へない譯である。さうした一々の例證は姑らく措き、結果だけをいへば、最初、*ku*が占名に用ゐられ、*chi*が梵名に用ゐられたとしても、後代になると、梵名も常用されて、占名の如く用ゐられ、それらが、占語の碑銘に重ねて用ゐられるに至つたのは、敬稱の性質上、寧ろ當然のことであると私は考へる。

その第二は、「翻譯するといふことは、單なる外國語の借入に比して遙かに高級複雑な作用である。その初期に於て先づ複雑困難な翻譯を成し得たチャム人が、數世紀を経てから*ku*某といふサンスクリット式王名をそのまゝ持來りて之に*ku*をつけるといふ機械的な單純な行爲を行ふのは順序倒逆の感はないか」といふのである。

單純から複雑へ進歩するのは、一般的理論としていへ

るであらう。されどそれと共に、複雑から單純へ退化すること、これを認められねばならぬ。その上必ずしも理論で律せられぬ、特殊の事情の存することもまた、計算に入れられねばならぬ。そこに歴史學の興味も特色もあり、存在理由もある。初期の占婆の梵文碑銘が、讀み得る限り、正確な梵語で書かれて居り、「數世紀を経てから」のそれが、これに反してゐる事實は、抑も何を語るものであるか。私は、初期に Ku を Ch に意譯したものは、占婆の歴史上から考へて、當然、この國に移住した知識階級の印度人であつたと見做してゐる。これその初めて見える Vo-gah 碑文が、正しい梵文で書かれてゐる所以である。かゝることは、我が國に於いて、初期に文筆を掌つたものが、歸化人であつた實例からでも容易に想像されるであらう。かくの如きことこそ、「行爲の自然的過程から推して」當然であると思はれる。況んや同義の Ku と Ch とが、敬稱の性質上、後世になると重用されることをやである。私が、Ku を Ch に意譯したと説いてゐる逆を考へて、Ch を Ku に翻譯したやうに考へられる夫人の反駁は、結局、私の説いてゐるところと一致してゐるのが見出されるであらう。何故なら

私が、Ku を Ch に意譯したものは、占婆に來てゐた印度人であり、從つて初期の占人ではないと考へてゐるのを、夫人は、占人が、「その初期に於て先づ複雑困難な翻譯を成し得た」とは考へられないといつてゐられるからである。

以上の如き理由で、「無理な氣がする」といはれるのは、畢竟「Ch を Ku に翻譯したと見る」ことであつて、Ku を Ch に意譯したことではないことがわかる。Ku を Ch に意譯したことは、當時の事情から考へて想像されるが、「Ch を Ku に翻譯したと見る」ことは、私にも「無理な氣がする。」それ故、夫人の反駁は、私の所説の逆の反駁で、結局、私の所説を肯定されることとなり、從つて毫も Ku || *Ku || Ch 即ち Ku || Ch を反駁されたことにならぬ。然るに夫人は、「區も Ku ではあるが、その Ku たるや Ch を翻譯したものでないと思はれる」といはれるが、勿論「その Ku たるや Ch を翻譯したものである」く、Ku は立派な占語であつて、梵語 Ch に當るものである。そこで區が「Ku ではある」以上、Ku に Ch の意ある限り、Ku || Ch と考へて、何の差支へがあらうか。夫人は、「區が既に Ku と關係なければ、

勿論連も達も Māra と關はりある譯はない」といはれるが、既に區を Ku と關係させて、それが Čhi の意であると考へられる以上、連・達・達のいづれかと、Māra と關はりあつたとてよゝ譯である。假りに一步を譲つて、連・達・達のいづれも、Māra と關はりなかつたとて、そのため區と Ku 従つて區と Čhi との關係がないといはねばならぬ理由はない。私が最初、始祖の漢名が、占名の音譯であり、梵名が、その意譯ではなからうかと、單に想像してみたゞけで、さて實際に調べた場合、區と Čhi との説明はついたが、連・達・達のいづれかと Māra との説明がつかないからとて、説明のついた部分までも、否定し去る必要はないと同時に、區と Čhi との關係がついたからとて、連・達・達のいづれかと Māra との關係が、どうしてもつかねばならぬといふこともない。蓋し區や Ku の如きは、多く用ゐられるものであるが、連・達・達や Māra の如きは、必ずしもさうではないからである。連・達・達のいづれかと Māra との間に、若し關係がありとすれば、連・達のいづれよりも、達が最も可能性があるやうに解したのが、舊稿の所説である。

併しながら夫人は、私の所説に反對して、結局、關係がないと力説される。その反駁は、時に誤解と冗漫との免れ得ないものがあるけれど、微に入り細を穿つてゐるので、こゝには到底、一々これに應酬してゐる餘裕はない。そこで姑くこの點に關する限り、夫人のいはるところに従ひ、連・達・達のいづれかと、Māra との間には何等の關係もないと認めても、さてその主張される區達説には、果して傾くことができるであらうか。

(2) 夫人は、自説の傍證として、Aymonier の紹介せる『占王年代記』の占語王名を検し、「K の音を含むもの絶對に多く、T・P 等の強い音を以て始まるか又は之を含んでゐないものはない」に反し、「連の如く輕くて弱い音を持つたものゝ可能性は割合に少く思はれる」とて、區連・區達・區達の中、區達が最も可能性多く、區達これに次ぎ、區連最も少きことを指摘されたが、今その年代記に見える王名の一語づゝが、如何なる音を以て始まるかその統計を百分比に取つてみると、P は四六%、D は九%、K は八%、T は六%、R L は合せて四%である。これによると、P の如き唇音にて始まるもの絶對に多く、D T の如き舌音にて始まるものこれに次ぎ、K の如き喉

音にて始まるもの、漸くその次に位する状態である。而してRLの如き、またこれを見出し得ない譯ではない。Pの多きは、共通なるPoの如き語あるため、姑くこれを除いておくと、Dで始まる語最も多く、Kこれに次ぎ、Lはそれよりも少いので、若し夫人の如き考へ方を以てすれば、區連・區達・區遼三者の中、區達が最も可能性多く、區遼これに次ぎ、夫人の所説とは相反する結果となり、區連の可能性最も少いことのみ、一致することゝならう。されどかくの如きは、區連・區達・區遼のいづれが正しいかを決定する。標準となすに足らぬこと固より論を俟たぬであらう。

(3) 林邑に關する支那の文獻で、『水經注』は、「最も依據するに足」るものであり、且つ「年代としては事件に最も近く作られたもの」であるにしても、さうであるからとて、これにあるところの區遼が、直ちに最も正しいといふことにはならぬ。何となれば、他に區連・區達の如き傳へがあり、且つ遼の字の如き、達を達と書したる場合酷似して居り、從つて傳寫などの誤も、絶対にないとはいへないからである。殊に遼の字は、もと遼と書したので、漢碑には遼と見え、六朝碑以後遼の字の見えるこ

とは、高田忠周氏の『漢字詳解』(頁一七九一)の中にも指摘される通りである。果して然らば、最初から區遼と書かれてゐたかは、幾分疑はしく感ぜられる。また夫人は、區遼の例證として、「Po Kaなどは、どうやら之に近いものゝやうである」といはれるが、Po Kaの、どこが區遼に近うのか。PoはPoやpuと同じく「主」の意であり、Kaは、Kuに語勢を置いた爲め、語尾の延びただけで、Chと同じく、王や神その他の尊稱に用ゐられ、「吉祥」を意味するものであるから、Po Kaは、*Seigneur fortune* の意に外ならぬ。私が、區をKuと説くに對して、夫人は、「區もKuではあるが」と、兎も角これだけを認められた以上、Po Kaの Ku即ち Kuを區遼の區に比定するとしたら、當面の問題たる遼には、抑も何を當つべきであらうか。假りに Kuを遼に當てるとせば、區に對しては如何にするか。私は、この Po Ka (=Ku)を以て、安南の文獻に、第矩(『越史略』卷二)・制矩(『大越史記本紀全書』卷三)にて音譯せられた *Cai Ku* (*prince fortune*)と、殆んど同意味であると考へる。これを要するに、私は、「區遼説に傾き度い」と欲しても、以上の如き理由だけでは、到底これに従ふことがで

きないのを、如何ともすることができぬ。かくて區達 II *Čri Mata* 説は、未だ完全に反駁されず、新しく提唱されたる區達説にして、未だ依るに足らずとせば、今一應區達 II *Čri Mata* 説をふりかへつてみる必要があらう。

(一)區憐・區連・區達・區達などの區即ち **Ku* が、占語 *Ku* の對音で、梵語 *Čri* の意に當ることは、『占佛辭書』に *Ku=Čri* と見える限り、これを認めても、大なる支障はなさうである。

(二)區憐と、區連・區達・區達とは、同時代の占王と見做し難いから、姑くこれを措き、後の三者に就いて、その中いづれが正しいか決定せねばならぬ。

(三)區達と掲げてある後魏の酈道元の『水經注』は、區連と記してある唐の太宗御撰の『晋書』や、區達と載せてある唐の姚思廉の『梁書』よりは、撰修年代が古いけれど、達の字に就いては疑ひがあり、達即ち達の誤字から來たのではないかと思はれる。區達と載せてある『梁書』の海南諸國傳は、三國の吳の孫權の時、交州刺史呂岱が、扶南・林邑などに遣はした、宣化從事朱應・中郎康泰の報告書に基づいて綴られたもので、當面の史料として、『事件に最も近く』書かれたものに據つたものであ

る。區連は、『晋書』編修の際、既に區達・區などの異説があつたので、これを決定せむため、その準據を區憐に取り、字形が達・達に似て、字音が憐に近き連を選び以て出來上つたものと思はれる。後には、胡達といふが如き、達を名とする林邑王もあるのである。そこで支那の史料による時は、原形を區達であると考へると、區達や區連も、何とか解釋がつくであらう。この解釋は、區達や區連を原形と見做した場合よりも、無理がない。

(四)達即ち **Dat* は、梵語 *Mata* に當る占語の對音ではなからうかと想像したが、私の舊稿であつたが、こゝには姑らく *Mata* の意味と關係なく、達即ち **Dat* に就いて一考してみたい。今日の占語には、これに適當しさに思はれるものはないけれど、Huber の讀解した *Mison* (美山) の碑銘中の '*ayauin*' の語に就いて、Durand 師が、「この語は、もはや行はれて居らず、近代の占人には、了解されもしない」といつてある如く (*B. E. F. E. O.*, V. 368). 今に存しなくとも、古くあつた語もあり得るのであるから、**Dat* のそれも、恐らくこの種の占語或ひは占名の對音であつたに違ひあるま

それを求める一つの手懸は、占語が属する Malayo-polynésien 語族の中に、廣く行はれてゐるその親縁語を見出すことである。先づ占語と最も關係の多い馬來語を検索するに Favre, *Dictionnaire malais-français* (Vienne, 1876, t. I, p. 825) の *daruk* の條に、これは *datu* であるといふ。この語を解し、

(a) grand-père : chef de famille : titre donné à certains chefs :

(b) nom donné aux magiciens, aux sorciers :

(c) les manes des ancêtres, certaines divinités.

とした上、Malayo-polynésien 語族の親縁語を列挙してゐる。即ち、

<i>Kawi,</i>	<i>datu, daruk,</i>	(vieillard; prince.)
<i>Soudanais,</i>	<i>datu,</i>	(chef.)
<i>Batak,</i>	<i>datu,</i>	(augure, docteur, prêtre.)
<i>Macassar,</i>	<i>datu,</i>	(titre d'un chef.)
<i>Tagal,</i>	<i>dato,</i>	(")
<i>Bisaya,</i>	<i>dato,</i>	(")
<i>Dayak,</i>	<i>tato,</i>	(")

Aymonier et Cabaton, *Dictionnaire cam-français* (Paris,

1906, p. 214) に (i) *dat* は二語あり、それらを合せて (a) *volonté*, (b) *pouvoir*, (d) *permission*, (e) *corps* などの意あることがわかり、且この語は *adat* の逸頭語 (aphérèse) であるを見る。その (ii) *adat* の條 (p. 10) を参照するに、(a) *loi*, *règle*, *précepte*; *mœurs*, *usages*, *coutumes*; etc.; (b) *pratique magique*; *sortilège*; *magie*; *sorcellerie*; (d) *permission*; (e) *corps*, *soi*, *soi-même* である。 (i) が (ii) の單なる逸頭語であることは、兩者の内容には、變りはないと思はれるので、(i) の (d) と (ii) の (d) とが、それぞれ同様である如く、舊稿にて類推した如く、(i) の (a) と (ii) の (a) ともそれぞれ相對應するものに相違ない。然る時は、(i) にも亦、(ii) の (a) の意義を含んでゐる筈である。してみると曩に挙げた馬來語 *datu* (a) (b) の意味と、占語 *dat* の (a) (b) のそれとは、殆んど相對應するものと見られ、音の相類似してゐることと共に、兩者の親縁語なるに注意せざるを得ないであらう。而してこれら兩者の (a) (b) の内容は Cordés 氏が、

“Dans les pays hindouisés d'Indochine et d'Indonésie, la fondation d'un royaume, d'une dynastie,

s'accompagnait de pratiques magiques auxquelles l'épigraphie fait allusion." (*B.E.F.E.O.*, XXX, 37.)
 といふ如く、王、殊に始王に於いて、渾然融合するを見るのである。

上記『占佛辭書』には、adat 語原を解して、Arabe 語 'adat から來たやうに示してゐる。この 'adat は、廣く波斯、土耳其、印度(Hindustani)、馬來などの諸語に取入れられ、回教文化と共に、東方に傳播してゐるので、その影響を受けてゐる占語の中に、それが見出されたとして、毫も怪しむに足らないのであるが、それらはいづれも adat の (a) の意味を有するだけで、(b) のそれは持つてゐない。そこで新しく考へられることは、占語には、もと古く馬來語 datu と共通な dat があつたところへ、後世、Arabe 語の 'adat が輸入せられ、これら兩者が、その音の類似せるため合流して、今の如き dat や adat の語ができたので、同辭書に解くが如く、dat は、adat の aphérèse と見做すべきでなく、本來 dat があつたので、新しく輸入された adat をも、却て dat で解せむとしたものと見るのが、正しい見解と思はれること、これである。Cabaton が、占人の梵語攝取に對して、"L'examen

des textes montre clairement que les Chams ont une tendance marquée à expliquer, par des mots de leur langue, les termes sanscrits dont le son s'en rapproche quelque peu." (Nouvelles recherches sur les Chams, Paris, 1910, p. 15, n. 4) といつてゐるが、占人のArabe語攝取の場合にも、同様の傾向の働いたことは、認められねばならぬ。

かくの如く考察して來ると、達即ち *Dat は、datu, datu, dato, tato などに於ける如く、一族或ひは一邑、一國などの長者をあらはす語であるといへるであらう。

Crawford は datu に就いて、"literally, an ancestor, and figuratively a lord or seignior" (*A Descriptive Dictionary of the Indian Islands & Adjacent Countries*, London, 1856, p. 182) といつてゐる。それば區達即ち

*Ku *Dat は、畢竟 Yān Pō Ku Ku Dat などの略稱で、王の尊稱に外ならぬことになるのである。それ故、四世紀末から五世紀初にかけて在位したる Bhadravarman I (Śrī Māra の碑銘に次で、最古の三梵文碑銘を遺した Dharmamahārāja Śrī Bhadravarman[deva]) が、『晋書』(卷九七)・『水經注』(卷三六)などに(范)胡達と見

えるのも、それが (Po) *Ku *Dat であつてよゝ譯である。支那や安南の文獻に、占王の固有名詞の如く散見するものも、實は王の尊稱であつたり、稱號であつたり、乃至は單に王そのものを呼ぶ普通名詞であつたりする場合の相當あることは、改めて發表する機會もあらう。かくて區連・區達・區遼の中、區達ならば、右の如き解釋が下せるが、區連・區遼では、これを一元化する解釋が、いづれも困難である。

(五) 漢名區達と梵名 *Cūṭi Māra* とが、占名 *Ku *Dat を介して、舊稿の如く、意味の上にて結び付くことができるとしたら、區達 || *Cūṭi Māra* 説の成立は、固よりのことであるが、たとひ意味の上では、區達即ち *Ku *Dat と *Cūṭi Māra* との間に、毫も關係がないとしても、區達と *Cūṭi Māra* とが、共に同時代に生存し、同國の始祖であると認められる限り、如上縷述して來た理由によつて、依然私は、區達 || *Cūṭi Māra* 説の可能を信ぜざるを得ない。若しそれ原碑文の *Māra* の讀解に對する疑義に至つては、日を異にして梵文學者の教を請ひたいものである。

曾て私は、東大史學會大會の東洋史部會で、「唐代に於

ける占婆の曆法に就いて」述べたことがある。その梗概は、『史學雜誌』(四六ノ七)に載せられてゐるが、詳細の研究は、まだ發表して居らぬ。それは、まことに零細な記事であるが、『舊唐書』(卷一九七)林邑國傳には、『俗以十二月爲歲首』と見え、『新唐書』(卷二二二)環王傳には、「以二月爲歲首」と見える。その孰れが正しいかを確かめるため、*Caitra* 紀元の年・月・日・曜日の明記された、唐代に於ける占婆の碑銘を検索してみると(1)北印度で行はれた、望から望へ數へる *pūrṇimānta* 法では、解釋の不能なものもあるが、(2)南印度で行はれた朔から朔へ數へる *amānta* 法では、それが可能なことがわかる。そこで *amānta* 法によると、歲首の制咀羅 (*Caitra*) 月は、二月一日から末日までであるから、二月を以て歲首となす『新唐書』の記載の方が、正しいことになる。それと共に、この曆法を通して知り得ることは占婆に影響した印度文化が、大體に於いて、印度南方系統のものであるといふことである。

これに對して、榎一雄氏は、セデス氏「カムボジアに於ける十二獸環の起源」(『東洋學報』二三ノ四)に於いて、「自分は〔杉本〕氏の結論を以て鐵案であると信ずる

が、「杉本」氏が舊書の十二月歳首説を取上げられたことは既に誤でないかと思ふ」と述べ、その理由として、「舊書の林邑傳を吟味すると、少くとも以十二月爲歳首の部分は前代の史書に見えぬから、舊書の編者が當時の記録によつて補つた所でなければならぬ。而して唐會要卷九十八・太平寰宇記卷百七十六には明かに以二月爲歳首と見えるから、舊書は唐會要に直接據らないまでも、恐らく唐會要・太平寰宇記と同一の資料に據つたと考へられる。故に舊書の所謂十二月は、必ず二月の誤記又は誤刻に相違あるまい」と擧げてゐられる。

榎氏が、「前代の史書に見えぬから」、「誤記又は誤刻に相違あるまい」といはれるところを、私は、占婆の曆法と「占婆碑銘の日附に照して」誤に相違ないと確かめ、氏の所謂「鐵案であると信」ぜられる結論を得た。私の所説と、氏のそれとは、互に相俟つて完璧を期することができるのであつて、決して相背馳すべき性質のものではない。然るに、「舊書の十二月歳首説を取上げられたことは既に誤でないかと思ふ」といはれるのは、「相違ない」と信ぜられたる「鐵案」よりも、「相違あるまい」と考へられる本文批判の方が、より正しいと考へ

それによつて「既に誤でないかと思」はれたのであるか。何處に「誤でないかと思」はれる矛盾が存するのであるか。

思はず筆は走り過ぎて、與へられた紙數を超過した。思ふに、我が國に於ける占婆史研究が、以上の如きものであるとすると、その現状では、未だ蕾とまで行かないであらう。況んや開花をや。更に況んや成果をやである。佛國の東洋學者等が、この「消え失せたる王國」を見出して、斯界に印した數多くの足跡は、私等の前に展開されてゐる。一步々々それらを辿りつゝ、誤れるを正し、遺を拾ひ闕を補ふ自由は、誰人にも與へられてゐるのである。道づれの少き、蕭條たる天地も、辿り續けるうちに、樂しみは訪れるであらう。見よ、やがて蕾もふくらまむとし、その綻び初める春の動きも看取されようとしてゐるを。そこに洋々たる希望の、湧かないことがあるであらうか。我が國に於ける占婆史研究は、今やかうした現状にあるのである。

追記

(昭和十二年一月十四日)

森鹿三氏が、拙稿を讀んで、連・達・達の問題に就

いて、頗る有益なる御注意を惠まれたので、こゝに附記して、深く同氏の好意に感謝したい。

『水經注』の舊板本は、すべて連であつたが、清の趙一清が、『梁書』に達とあると注意し、同じく清の戴震が、これを達と改めて以來、通行本は達となつたので、『水經注』の達は、新しいものである。然らば『梁書』に、果して達とあつたかといふに、百衲本・

南監本は達、北監本は達、汲古閣本、殿本は達である。それ故趙・戴兩氏は、第一の達を以て達としたのであらう。

以上が森氏の御注意の要點である。これによつて區達説は解消した。そこで後に残るのは、區連説と區達説との兩者であるが、果していづれに可能性が多いであらうか。

(二月二十一日追記)